

空



2006年

SORA 14号

晴夜 (14) | 1

柴田 佐知子

大鯉は大きくめぐる桜かな

墓山に束子を使ふ花の昼

田の神がぶらつく花の夜なりけり

〔毎日新聞〕掲載

立ち止まるとき垂直の遍路杖

清流の魚は素早し胡桃の芽

春泥の中に小さな村があり

退屈な極楽を出て囀れり

父母に同じ夕暮桃の花

雛の間にくれなゐの夜来りけり

微
熱

高倉和子

見上げたる幹に日の筋仏生会

春の海ゆらりと地球動きけり

鷹鳩と化して大空忘れをり

見られみて微熱持ちたる雛かな

恋猫の戻りて眠るばかりなり

ぞくぞくと信者入りくる花の門



何もかも上手くいきたる春の夢

霧や居心地のよき檻もあり

梁太き頃の生家や初鯉

蛇穴を出て墓石に添ひにけり

張りつめし色となりたる袋角

虫干しのひらりと母を隠しけり

滴りの中に祈りの膝を折る

梅雨に入る畳の真中少しくぼみ

日かげりし山は大きく田植かな

桃霞

中田みなみ

誕生日

巡り来し一と歳大事初ざくら

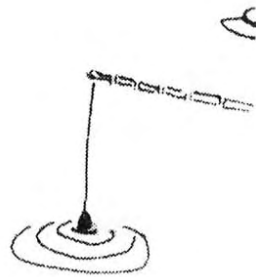
誰も居ぬさくら探して歩きけり

花冷や石屋が磨く黒御影石

桜湯や絹座布団の房ゆたか

その上に城址の見ゆる桃霞

すべりしは誰春泥の光りをり



万愚節桃の花粉が缶詰めに

祖父の忌の池に膨らむ種子袋

羽根締めて歩む孔雀や春嵐

落ちぶれし姿羊は毛を刈られ

霾や後歩きの羊飼

赤は雌黒は雄とし金魚買ふ

遠城のけふ白じろと端午かな

夏木立遠き記憶の池探す

純情と昔は言はれ月見草

満潮線

荒井千佐代

満ちて来る潮の濁りや聖灰祭

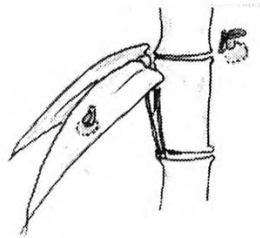
父の忌やげんげの畦をうから来る

聖金曜満潮線を潮打ちて

園児熟睡すものの芽に包囲され

弾かずしてピアノ大切桜草

つちふるや落暉の沖の遠くあり



涅槃会の潮に透けたる礁かな

桜蘂降る投函の悔ひすこし

身の裡に死の芽の育つ春の闇

鳶交む授乳の視野の端つこに

花ミモザ文書く卓のつめたくて

哺乳瓶洗ふ水音も夏に入る

窯元の陶の看板つばくらめ

白南風の船台を船すべり出る

しんがりに船長降りる青嵐

空作品抄

柴田佐知子

ぞくぞくと信者入りくる花の門 高倉 和子
何故か不安な印象をもってしまふ。「ぞくぞくと」とい
う言葉によるものだろう。

赤は雌黒は雄とし金魚買ふ 中田みなみ
なるほど。金魚を飼っていた時、漫然と私もこのように勝
手に決めていた。みなみさんの句はいつもはっとさせられる。

たいくつを知らず金魚の泳ぎをり あさなが捷
ひらひらと泳ぐ金魚。狭い空間でいたく退屈しているか
もしれない。「たいくつを知らず」は人間の勝手な断定で
ある。しかしそれが面白い。

沈むを知らぬ浮草を突つきけり 小林 朱夏
いつも明かるく颯爽とした朱夏さんらしい。つんつんと
浮草をつつく姿が見えてくる。「沈むを知らぬ」は確かに
浮草の姿だ。

菖蒲湯の胸はづかしき子なりけり 里中 章子
年頃になった女の子を詠んで鮮やか。言葉の省略、配置
が見事である。

黒ごまの跳ねる厨や春の鳥 苑 実耶
日常の寸景が焦点を絞ることで立ちあがってくる。実耶
さんの手で是非新しい台所俳句を。

蛇穴を出てより行方不明なり 高倉恵美子
なんともとぼけた味わいである。しかし恵美子さんの句
はいつも実がその背景にある。蛇もあの広い庭や田畑でよ
く出会われているのであろう。

淡雪に日ざし混じりてゐるやうな 服部 早苗
日ざしが混じるとの感受は、瑞々しい春の雪の捉え方だ。
早苗さんらしいのびやかな詠出である。

雪女ゆきの多さに疲れけり 樋口みのぶ
今年の雪は尋常ではなかった。雪女といえども歩くのも
難しいほどでうんざりしたのでは：などと自在に想像をめ
ぐらす作者であらう。

梧桐に青き雨降る昼餉かな 青山 悠
静かな雨であらう。この昼餉はひっそりとした感じがす
る。青々とした梧桐の雨が美しい。「昼餉かな」とのさつ
ぱりとした抑えが効いている。

名を聞いて十二単をさらに見る 秋 千晴
石段をさくらさくらの愛宕山 //
十二単は野原に自生する草花である。穂状の淡紫色の花
は美しい。その優雅な名を聞いて、更に身を屈めて見入っ
たのである。二句目の調べも楽しい。千晴さんの素直な句
柄は魅力的だ。

歩板渡して仕事始かな 吉村 摂護
歩板は渡るために架け渡す板である。これは岸から初漁
へ出向く船へと渡したものであろう。具体的に詠み止めら
れた強さがある。(以下略)

空集

柴田佐知子選

人呼んで伝来の白起しけり
牙旗を背に荒野を走る夢はじめ
黒潮の洗ふ五島や冬燕
歩板渡して仕事始かな
玄界に椿の島の浮きにけり
ぴりぴりと白魚枿をこぼれけり
春の海とろと大船押されくる
囀を集めし槓の大樹かな
心持ち顎上げてゆくサングラス
故郷に残るはこべら納骨堂
父母眠り蛇笏龍太の山眠る

福岡

吉村 撰護^{しやうご}

福津

野畑小百合